



三都學士詩林叙

三都學士詩林叙



三都主人後四橋先生

題也先生十一入京師

窮古義學二十游京

都周旋後周芝山之位

三古為浪新格詩發

之間於其文字雜古史腐

令非所敢抗也頃做行長

癖讀三都學士品其樣

也真持修公觀者一陽

三嘆嗚呼如此編強在

夫子難生 東方不才

尚然身余嘉書或冠其
始

蘆洲少輝毫折

野橋侶舍

三ヶ津早老評判記

江戶之卷

經學家之部

極上上吉 宇佐美五助

取目 下リサレクノ身一人均ガ温厚の
君子でござる 妙又物見識誠由まじく
なきまじく先師祖傳の經學の道ヲ
マシテ生れ成内引直しの故あるを意味
つの座落しでござりませう

大上上吉 松崎才藏

取目 七師を其の仕立用くあつて
二ハ多也ござりませう **引キ組** 經學をうり
志やわらぬ侍文の部へも出せせぬ

既記 櫻子 此先生ハ清文也 中ノ
芝園の七子子随一と云々 夫人下
中ノ尚何大孝家の礎へ云々

上上吉 井上原藏

既記 先生ハ此内ハ也 學問の内勤ガ
不ハ云々 且ハ中ノ 蘇我ノ 廣也 教授
云々 其也 情云々

上上吉 井上仲

既記 此亦父其蘭基の佳名哉 下云々
此人 拙下云々 ワル組 叔父の 師學子ハ
似也 云々 既記 亦ハ此也 云々 云々 云々
又ハ云々 云々 云々 云々 云々 云々
卷軸

極上吉 岡井那太夫

既記 此亦 評判ハ云々 云々 云々 云々
字 字云々 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
先生下云々 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
殊 殊 殊 殊 殊 殊 殊 殊

待文家之部

極上上吉 瀧 彌八

引キ 學問云々 云々 云々 云々 云々
引キ 名高ハ先生 既記 在彼云々
云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々
云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々
云々 云々 云々 云々 云々 云々 云々

上上吉 江井甚之助

引キ 學問云々 引キ 引キ 引キ
引キ 引キ 引キ 引キ 引キ 引キ 引キ
引キ 引キ 引キ 引キ 引キ 引キ 引キ

いふと文庫が出来るていふ事人々信仰の
志ありて如某先生と云ふ事其年清史
宗でハ尚内の名家でと云ふ事

上上吉 宮願之右衛門

張先生 就つてハ陸奥がやと **阿光** なる
乃以仲間所合ハるハこそハ源光文系
下合と云ふ事然レ引イテハこそ事
下谷 此こそ此の先生ハ事ナリ

上上吉 須知文平

カラス 但 洋判ハるガハヤ **別** 乃
医学館の字跡ニ見テ置ても洋判
ハ事ナリハる事ナリ人ガ事ナリ
上上吉 葛波山人

以上 上方より此の事ナリ
新ハる事ナリ **打込** 但 賣解部ニガ
つてガヤ

上上吉 千葉辰右衛門

以上 江戸中ハ洋判ニ載つて唐待
尋事等故故中ハる事ナリガハ
此の事ナリハる事ナリ

上上吉 三浦左玄浦

以上 洋判ハる事ナリガハ
此の事ナリハる事ナリ

極上上吉 大内忠太夫

巻軸

引イキ組 先生の語はとゞく 書家 文素
家でもも郭能身と評列のさう
作はせきハ南朝の子孫でござる
傳はす所の文素をでしるゝもの
を中とせり

書家之部

天上々書 三井源玄書

ウレロ 子の師匠の書の先を 源五郎
程子の内の人々多くござる中
書名は房をささるゝ書家の部への色
もす書神の中での書家ハ関東一

上上書 東江山人

源五郎 籍を未聘より評列を
ござる也

上上書 源師道

源五郎 出典たけの体たけのこさ
大板でハ人々多く評列を
もす

上上書 伊藤善藏

ウレロ 書画大 源五郎 源五郎
と評列のヤヤと権の方面でハ
ござる 源五郎 書家では
この先の先生
志ヤヤ 源五郎 益道也

上上書 畠後少人

源五郎 出典たけの体たけのこさ
内はとせり 評列が
出で

上上書 河保壽

改取久し目録より由隠しと雖も大
徑別はごさうかんどう山伏山伏
とくみりてい書所もあつたことハ
まひ見りてい書所もあつたことハ

春軸 太夫本
上上吉 細井九皋

ワレロ 弟家ハ二代つづきあつたことハ
あつたことハ先主ハ親父廣隆の
系統にけつぎ子書が足り山ま限
二がきより割る上り中ハ山ま限

太夫本之部

上々吉 林 代角

上上吉 青木分藏

上々吉 廿部 七彦

改取 字号人ダリ判あてい書

新井座

常内休 太宰 座

南郭 座

総巻軸

大上上吉 秋生宗右衛門

改取 字号のついでにあつた親書の様
がれハ金谷先生とて首ひます

京都之巻

詩文家之部

大上上吉 芥川養軒

形は水あみどけ部のふと家^家の値
一丁載せしむ^引ききりて京で
後が腕かいする女があらうぞ

上上書 林周出

ワレロ 何れかこころと思へ八束の巻へ

ふきました後いふハ^引ききりて

いづくもいふをいひたけ京で供

生が所まで

上上書 清田文典

本や組 近きかい評判のひ先生を

引^引た^引た細^引でこころを京へお女を

あしき

上上書 重野梅山

形は水出精だけ人々なりす

形は水あみなりなり

上上書 岡島鳴

引^引た^引た評^引判^引が水あみなりなり

こころは評

上上書 水六郎

引^引た^引た水あみなりなり

引^引た^引た評^引判^引が水あみなりなり

上上書 谷尾仲

本や組 日く之所の水あみなりなり

引^引た^引た水あみなりなり

引^引た^引た水あみなりなり

引^引た^引た評^引判^引が水あみなりなり

卷軸

上上吉

那蘇之書

本や世に在りての書より此名を尊ぶるなり
[引イキ] 此の書は彼で二つありて其の書
その子共々やしくしりて付て此の書
とんと懐きしるすなり 部の立物く

伊藤家之部

大上上吉

伊藤正藏

[引イキ] 此の書は同の書より此名を尊ぶるなり
此の書は彼で二つありて其の書
その子共々やしくしりて付て此の書
とんと懐きしるすなり 部の立物く

上上吉

齋方五右衛門

[引イキ] 此の書は同の書より此名を尊ぶるなり
此の書は彼で二つありて其の書
その子共々やしくしりて付て此の書
とんと懐きしるすなり 部の立物く

上上吉

久米團次

[引イキ] 此の書は同の書より此名を尊ぶるなり
此の書は彼で二つありて其の書
その子共々やしくしりて付て此の書
とんと懐きしるすなり 部の立物く

卷軸

上上吉

皆川文藏

[引イキ] 此の書は同の書より此名を尊ぶるなり
此の書は彼で二つありて其の書
その子共々やしくしりて付て此の書
とんと懐きしるすなり 部の立物く

上上吉

伊藤忠藏

太夫本

[引イキ] 此の書は同の書より此名を尊ぶるなり
此の書は彼で二つありて其の書
その子共々やしくしりて付て此の書
とんと懐きしるすなり 部の立物く

総卷軸

上上吉

金就直人

此は水島多太郎の所蔵なり
此は水島多太郎の所蔵なり

書家之部

極上上吉 烏石山人

ワル口山人の大名宛の手紙がたゞでせう

なる所々、甚だ其の趣向の妙なり

やれ書名、日本一、流く人、てきり
まやぬ

上上書 水薬師伝書

ワル口 京大坂の中下、此方の表々

そで、水島多太郎、其の所蔵なり

上上書 扇籠山人

ワル口 西行草書、此の所蔵なり

久しく京都へ出出、此の所蔵なり

此の所蔵なり

此の所蔵なり

巻軸

上上吉 大雅堂

ワル口 画家、此の所蔵なり

此の所蔵なり

此の所蔵なり

水島多太郎

大坂之巻

詩文家之部

極上上吉 河合源吉

本や組、此の所蔵なり

ます。だり。多。毒。が。此。上。子。を。考。へ。た。ま。す。
そ。の。中。に。著。述。を。見。た。志。は。[取取]
追。討。文。集。が。出。た。ま。す。学。問。の。中。に。
ま。い。と。ろ。う。試。み。ら。れ。ま。す。

上上書 奥田杉齋

[取取] 近年文書よりとりまじりより
まじり [ワル] 左傳の文法城やうま
まじり

上上書 鳥山右内

本や組 水秀才でござり [取取] 子同
より 清城 稽出中 [鳥山組] サア 才が
い。く。清。が。上。の。才。や。[取取] 左。傳。で。こ。さ。り
ます。先。生。の。ま。じ。り。時。城。の。内。知
と。ま。ま。と。大。城。人。を。考。へ。し。ゆ。う。と。成

ま。い。り。く。強。信。と。ま。ま。け。り。ま。す。
修。の。由。知。易。下。こ。ま。ら。い。

上上書 真玄環中

[取取] 才よござりいんがとらます [取取]
鳥山奥田よりハちを上げまらぬ [取取]
上上書 下れがうとまを

上上書 世輪左門

[取取] 此れは才の精つとまと思ひぬ
略りみ核列し

上上書 都嶺山藏

本や組 小説家の才を考へた [取取]
大柳下こさります [取取] 小説
板こさります [取取] 作ハ小説を思ひます

上上書 名春卿

本ヤ組 此書海島出来ルル中評判下
ごさるワルロイヤル六文法書の書評
まどまのさ [評] する目出なる下
オナオスガ 勢まき下

上上書 西川良助

本ヤ組 山名高樹より中世ノ家
先生ク [評] 左記でニヨリます
高部ニ此書方と致すニ致す
後作ハ均書でニヨリます

上上書 新田角次郎

ワルロ 新名高ひがや [引] 大坂
はまの學者の新入があるトハナラ

評取 [評] 左記でニヨリます
先生でニヨリます

上上書 釋 蘭洲

評取 九条島の和書林下ニヨリ 詩ガ
此上子下ニヨリます [ワルロ] 歴観
評取 今くニヨリます和書の新
評取 詩ハント用久天室の作共
の詩ノ見へます [評] 此書ハ
巻軸

上上書 片山忠藏

本ヤ組 七師明書先生ニヨリ
學問ニヨリ [引] 木上吉の
此書 [評] 界ニヨリ
此書待てます

經學家之部

大上上吉 續續伊助

本ヤ組 近江 河村がゆきよとていふ魚
ワロ口 大田守解の河村をうらむや
此れ 河村のいふこと補ふも良兼の
其儒者先出の中下いふやうに

上上吉 竹條田由菴

ワロ口 世ががらふく角に物少を指
定り 隆梅とてさる 取取云 其が大
板宗守家下の人物下ごさうすす
まづく 他人のうけがとてごさる由は
余の先出く

上上書 山口正平

上上書 同 幸之助

取取 宋字城のまじり 其書 其書
詳に 此見方とて 道家の才子下
ごさうすす

上上書 田路半藏

取取 見識の附やうとてごさる
進有 良兼の太儒者 其書
土下 末へ頼母く 其書

上上吉 三宅守次郎

ワロ口 書の家平儒者 取取 此書
以家 拙者 此ハ見方 見へ来り 拙又
以字 同く 此の 思方 其書 其書
といふ 其書 其書 其書 其書
の 拙者

大夫本

上上吉・中井若木

上上書 曰 廣一治

取取 本家柳字 浮利のまゝ
大板のまゝあり

書家之部

上上吉 尾寄散木

取取 良筆法の切りたが
大まゆり

上上書 隴陽

取取 附陽子の事ハ本出地下ハ
物と小北人物ハことつて
所名の高ひ先生下
書ハ別とく入るあり

上上書 俣山禪師

取取 久々の大板ハ保
字ハ関西にこそ
少使と筆に在

巻軸

上上吉 為君東齋

取取 川身持が
取取 左取
之一番分り

取取連名

大坂 葦葎堂

京都 風月堂

江戸 平賀源内

小寺彦
玉口又彦

天和五子年二月

大坂彫者 萬兵衛



文之三葉月のちの
舟の通る水々



